



巻頭言

「success」を願って

日本学校教育相談学会 宮城県支部理事長 渡辺 美貴

会報「きずな」第20号の巻頭言を申し上げる機会をいただいたことを心より感謝いたします。日本学校教育相談学会宮城県支部が設立された翌年から、たゆまず会員相互の「きずな」を繋いできた会報「きずな」。東日本大震災の後に発行された「きずな」を通して、過酷な教育活動の中で、児童生徒に寄せる先生方の温かい思いや、悩みながらも子どもたちのために試行錯誤し再挑戦する姿に、何度励まされたことか。



この度の第20号の発行にあたり、わが子が幾多の困難を乗り越え成人式を迎えた時のような感慨深い気持ちであります。巻頭言を申し上げるにあたり、まず千葉久美子広報委員長をはじめ、これまで「きずな」の発行に携わってくださった広報委員の先生方に心より感謝申し上げたいと思います。

さて、表題の「success (サクセス)」の語源は、ラテン語で「成功」を意味する「successus」に由来し、これは動詞「succedo」(登る、後を追う)からきています。suc-の「下に、次に」と cedo の「行く、進む」が組み合わさり、「次へ進む」「後から続いて行く」という原義から「失敗の後に良い結果が続く」「跡を継ぐ(成功する)」という意味合いが生まれ、「成功」という意味に定着したそうです。派生語の「succession」は「継承」という意味です。「成功」とは単なる「良い結果」だけでなく「下から上へ」と目標に向かって諦めずに進んでゆくという過程そのものを意味するのですね。

今年、本支部は設立21周年という大きな節目を迎えます。学校教育における教育相談の大切さを理論と実践の両面から教えてくださった多くの素晴らしい先輩方の熱い思いと、会員同士の「きずな」を繋いでいきましょう。更なる success を心から願っています。



各委員会より

◇◇◇研修委員会◇◇◇

委員長 神田 裕樹

今年度の研修会は新型コロナウイルスの影響もなくなり、参加者同士の顔と顔が見える中での実施となりました。第54回支部研修会では、昨年度、仙台ブロック研修会の講師とし御依頼し、御好評いただいた東北薬科大の福地成先生を、今年度は宮城県支部としてお招きし御講話いただきました。第55回支部研修会では、心理検査をなかなか受けることができない、受けるまでに時間が掛かるといった現場の実状を踏まえた認知能力検査 NIMO の可能性について東北福祉大学の中村恵子先生に御講義いただきました。また、第55回支部研修会の午前に開催した研究・事例発表会では、中学校通級指導の実践として日吉台中学校の小山内仙士先生、中学校管理職の実践として川崎中学校の鈴木直美校長先生に御発表いただきました。

これからも会員相互の学びを深めて参りたいと思います。研修会の内容等につきまして積極的に御意見等いただければと思います。

○第54回支部研修会（対面で実施）

期 日；令和7年8月23日（土）13：30～16：30

会 場；名取市文化センター 小ホール

講 師；福地 成先生（東北医科薬科大学 病院准教授（講師）みやぎ心のケアセンター センター長）

内 容；「地域のつながりで支えるこころの健康」

○第55回支部研修会（対面で実施）

期 日；令和7年11月8日（土）13：30～16：30

会 場；東北福祉大学仙台東口キャンパス

講 師；中村 恵子先生（東北福祉大学 総合福祉学部心理学科 教授）

内 容；認知能力検査『NINO』を活用した児童生徒の理解と支援』

○研究・事例発表会

期 日；令和7年11月8日（土）9：50～11：50

会 場；東北福祉大学仙台東口キャンパス

内容等；事例発表

- ・小山内 仙士先生（富谷市立日吉台中学校 教諭）「会話から相談（対話）へ」
- ・鈴木 直美先生（川崎町立富岡中学校 校長）「子どもの姿を読み解く」



◇◇◇広報委員会◇◇◇

委員長 千葉 久美子

広報委員の皆様のご尽力により、会報「きずな」を発行しており、このたび記念すべき20号を発行することができました。これまでの「きずな」を振り返ってみますと、宮城県支部で開催した全国大会、東日本大震災、新型コロナ感染症等のたくさんの出来事を共に乗り越えた仲間の姿が記録されていて、このきずなこそが20号まで継続できた力だと確信しています。

今回お手元にお届けした「きずな」20号は仙台ブロックの高橋 晃子さんを中心に、令和7年度の活動のまとめが凝縮された内容になっています。仙台ブロックの皆様にご衷心より感謝申し上げます。

この会報はタイトルのとおり、会員相互のきずなをより深め、研修や情報交換の場になれるよう広報委員が心を合わせて、魅力ある紙面を作っていきたいと思います。また、公私ともにご多忙の中、快く原稿をお引き受けいただきました会員の皆様にご改めて御礼申し上げます。なお、20号以降の担当は以下ようになります。

◇第21号・・・担当：大河原ブロック

◇第22号・・・担当：大崎ブロック

◇

第23号・・・担当：石巻ブロック

第24号・・・担当：仙台ブロック

広報委員会では、コラムや推薦図書のご紹介も掲載したいと思います。是非、投稿をお願いします。

◇◇◇紀要作成委員会◇◇◇

委員長 中里 和裕

紀要作成委員会の仕事は、研究紀要「ふれあい」の作成です。研究紀要は東日本大震災以前は各ブロックの紀要作成委員が持ち回りで作成を担当・発刊していましたが、震災後は一時休刊となり、一昨々年、事務局担当の先生方の御尽力により12年振りの発行となった第8号を発刊することができました。そして、一昨年からは紀要作成委員会による作成・発行が再開され、「ふれあい」第9号を発刊することができました。再開に当たっては、これまでのブロック持ち回りでの作成を取り止め、紀要作成委員全員で作成を行うこととし、また、昨今のインターネットをはじめとするICTの普及状況を鑑みて、これまで紙面でお届けしてきた研究紀要を、今後は支部ホームページにWEB版として掲載させていただくことになりました。現在は第10号の発刊に向けて準備を進めているところです。

ところで、研究紀要は「研修・研究成果の整理・蓄積・保管」の場としての役割を果たしています（日本学校教育相談学会宮城県支部会則第20条）が、また、一方で支部会員による本学会認定の「学校カウンセラー」資格取得促進のための役割も有しています。「学校カウンセラー」資格は、取得すれば日本スクールカウンセリング推進協議会が認定する「ガイダンスカウンセラー」資格取得のための基礎資格にもなり、また、本学会の主催する研究大会・夏季ワークショップや中央研修会等の参加に当たっては、参加費の優遇措置も受けることができます。資格申請に当たっては、「相談研究実績」として、「本学会研究大会、または市町村以上の他学会や研究会においての紙上発表や口頭発表等を行った実績」が必要となりますが、研究紀要はこの「紙上発表」の場として御活用いただけます。

つきましては、今後発刊予定の研究紀要につきましても広く支部会員の皆様に研究発表・実践事例の寄稿をお願いしたいと思います。特に「学校カウンセラー」資格取得を目指す会員の皆様の積極的な寄稿をお待ちしています。この機会に是非、日頃の先生方の研究・実践の取組を他の支部会員の皆様にお伝えいただき、支部全体で共有することで会員一人一人の力量の向上に役立てて行きたいと思っておりますので、御協力のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

各地区ブロックより



◇◇◇仙台ブロック◇◇◇

仙台ブロック幹事 村上 誠

仙台ブロックの今年度の活動としては、令和5・6年度の2年間にわたり講師の先生をお招きしたブロック研修会を開催したため、今年度はブロック単独の研修会は行わず、8月に行われた第54回宮城県支部研修会の運営に携わるのみの活動となりました。

さて、ブロックの話題からは逸れてしまうのですが、高校の現場の状況についてお伝えしたいと思います。高校の現場が抱える大きな課題は「定員割れ」と「進路変更（中途退学）」です。「定員割れ」については、少子化と震災による地域人口減の影響により仙台市内の一部の高校を除き県内全域で同様の状況となっており、地域社会を支える“人財”の不足による影響が危惧されています。そして、「進路変更（中途退学）」については、以前大きな割合を占めていた生徒指導的事由が減少し、不登校が引き金となって進路変更に至る割合が増加している状況です。不登校になる理由としては、「学習内容や校風とのミスマッチ」「友人関係」「発達障害等に起因する学校不適応」「家庭環境」など様々ですが、いずれにせよ、せっかく中学校からお預かりした生徒を卒業まで導くことができないことは、私たちにとって非常に残念なことであるとともに、何よりも悩みを抱えた生徒がそのことを解消できずに学校から離れていくことは大変心配なことでもあります。そのような状況を踏まえ、いずれの学校においてもケース会議を経て、学級担任の先生、学年の先生方、養護教諭の先生、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの先生が一人一人の生徒に寄り添った対応に取り組んでいます。しかしながら、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの先生方の配置に関しては学校ごとに状況が異なっており、

各校とも必ずしも十分な相談体制がとれているとは言えないのが実情です。

そのような中で、支部研修会での学びやブロック研修会での同地区の先生方との交流・情報交換は、悩みや不安を抱えた生徒の理解と適切な対応の手法を学ぶとともに解決の糸口を見付けることができる貴重な場であると考えます。次年度はそれぞれの現場における課題を持ち寄って相談したり、効果的な実践事例を共有したりするなど、校種の枠を越えてそれぞれの取組を一本につなぐことができるようなブロック研修会を開催することができればと思います。

◇◇◇石巻ブロック◇◇

石巻ブロック幹事 麻喜 総一郎

石巻ブロックでは、昨年6月7日に本県支部副理事長である千葉久美子先生宅の教室をお借りして、令和7年度第1回目の研修会・茶話会を実施しました。参加者は12名でした。他ブロックから中里和裕先生や鈴木宏子先生にも参加していただき、また中里和裕先生、千葉久美子先生の教え子である若い現職の先生方にも参加していただいたことで、活気のある実り多き研修会となりました。

前半の研修会では、元万石浦中学校長の川村瑞隆先生を講師に迎え『教育現場が抱える課題について』というテーマで講話をいただきました。

講義の冒頭で、令和4年改訂の「生徒指導提要」から生徒指導の実践上留意すべき4点について解説していただき、それを踏まえて児童生徒の実態を考える上での小・中学校、高等学校の対応の違い、さらには生徒指導という観点から学級・学校づくりについて講話していただきました。先生の勤務された中学校・高等学校での実践にもとづいた内容は、とても説得力があり参加された現職の若い先生方にとって得難い学びとなったように思われました。

後半の茶話会では、若い現職の先生方が教育現場で直面する課題について共有することができました。現職の先生方が直面する課題をお聞きするにつけ、あらためて本学会の意義や研修という“学び”の大切さが実感されたしだいでした。

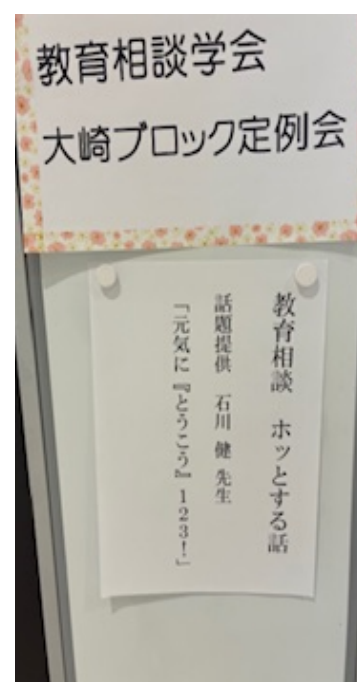


◇◇◇大崎ブロック◇◇

大崎ブロック幹事 鈴木 宏子

大崎ブロックは現在4名の会員を中心に活動しています。現役は1名なのでその先生の日程に合わせて研修会を開催しました。今年度は、7月に大崎ブロックの石川健先生に『元気とうこう！1・2・3！』というタイトルで先生の今までの相談活動の心得や“とうこう”に掛けた二つの意味（登校・投稿）をお話いただきました。石川先生には普段から相談者の心を包み込むような大きさを感じておりました。今回の研修会でも言葉や話し方一つ一つに相手に寄り添う優しさやすくい取るような温かさを感じました。とても貴重な時間でした。感謝申し上げます。

今後の課題としては会員数を増やすことをあげたいと思います。今年度大崎ブロックは2名の会員が加わりました。まだ顔合わせをしていますが、今後正式に私たちの仲間に加わることになるのでうれしいことです。



しかし、現役、それを若い教員の参加が少ないことに危機感をいだいています。どのようにしたら、悩みを抱えている現役の先生方の心に届く研修会になるのか、また、一緒に勉強していくことができる仲間になれるのかを模索し、焦らずに活動を続けていきたいと思っています。



◇◇◇大河原ブロック◇◇◇

11月29日（土）に大河原ブロック研修会を行いました。今回は、気軽に近況報告や事例の相談ができる場にするため、茶話会形式で行いました。かぜや感染症の流行等により、欠席となった会員もおりましたが、ブロック会員8名、大学院生1名に御参加いただきました。

会員のつながりで、話題提供として、宮城教育大学院教育学研究科の伊藤暦さんから「肯定的な関り方を生かした発達支援的教育相談の在り方」の発表もしていただきました。昨年度の研修で、支部副理事長の中里和裕先生（仙台大学体育科子ども運動教育学科教授）より、「担任とチームで取り組む児童生徒支援」について御講演いただきましたが、そこで学んだ内容とリンクするところが多く、実習校での「発達支持的関わり」のアプローチの取組事例（リフレーミングかるた）の紹介等、大変興味深くお聞きしました。教師側が肯定的な関りをしていくことが児童生徒の心の安定につながり、人や集団を変えるきっかけになることを改めて感じることができました。

その後は近況報告を行いました。現在直面している事例の相談もあり、ベテランの先生方が丁寧に対応の手順を伝える場面もありました。今後も支部ブロック会員同士のつながりを大切に、顔を合わせながら、気軽に相談し、学び合える機会にしていきたいと思っています。

大河原ブロック幹事 阿部 裕美



令和6年度支部研修報告

「令和7年度支部研究・事例発表会」

宮城県子ども総合センター 佐藤 志帆

「会話から相談（対話）へ」 富谷市立日吉台中学校 教諭 小山内 仙士先生

小山内先生は、学年や学級を超えたかかわりがしやすいという通級指導担当のメリットを活かし、登校時の解錠前から始業時の施錠までの時間に子どもたちと会話をしたり、挨拶を交わしたりしているそうです。毎日の会話や挨拶を通して子どもたちの姿や思いを捉え、一人ひとりに寄り添った言葉掛けや個に応じた通級指導に結び付けていることが分かる実践発表でした。

「子どもの姿を読み解く」 川崎町立富岡中学校 校長 鈴木 直美 先生

鈴木先生は、管理職に就いてからも様々な研修を受講され、そこで得た学びを活かした学校運営について発表されました。

個々の見取りを大切にし、児童生徒が見せる姿の背景や保護者が抱えている困難さなどにも目を向け、それらを理解した上で対応することの重要性を学ばれたそうです。担任など一教員だけで取り組むのではなく、学校全体で共有し、それぞれの強みを活かした役割分担によって対応していくことで安心感のある学校づくりを進めているという発表でした。

「第54回支部研修会報告」 仙台ブロック 堀内 恵理子

令和7年8月23日（土）、名取市文化会館を会場に第54回研修会が開催されました。東北薬科大学病院の福地成先生を講師に迎え、「地域のつながりで支えるこころの健康」という演題で研修が行われました。研修はペットボトルチャレンジから始まり、首位でゴールしたグループから「適切な助言」や「励まし」など成功の秘訣について発表がありました。その後の研修では、発達障害と診断された人や虐待を受けた子どもの増加の資料が提示され、都会化による支援対象の変化や、貧困、経済格差など、上流にある見えない背景に思いをはせることの大切さについて説明していただきました。また、「悪い習慣を変えることができないのは本当にその人の責任なのか」という問いを通して、課題がある人に関わる際には、現場への過度な集中により上流が見えなくなることや、犠牲者非難について注意が必要であることを学びました。危険度が高い人に働き掛ける「むしめがねアプローチ（ハイリスクアプローチ）」と、集団に対して働き掛ける「ふりかけアプローチ（ポピュレーションアプローチ）」のどちらの働き掛けが有効か、具体例をもとに自分の考えを深められたと思います。目の前の現象だけにとらわれず、背景にある仕組みや状況を想像しながら対応することの大切さに、改めて気づく研修になりました。

「第55回研修会報告」 大崎ブロック 末永 祐子

毎年楽しみにしている研修会。令和7年11月8日（土）東北福祉大学仙台東口キャンパスを会場に、東北福祉大学の中村恵子先生を講師にお迎えし、「認知能力検査『NINO』を活用した児童生徒の理解と支援」という内容で研修が行われました。初めて聞く認知能力検査「NINO」。(勉強不足ですみません。) 集団知能検査（個人も可）授業時間内に実施、検査結果は出版元から詳しく分析し返送される、WISC 検査との類似点や相違点、アセスメントの観点について詳しく解説をしていただきました。

学校現場では、発達障害や疑いのある児童生徒や学習不振による不登校の児童生徒が増えています。病院で検査を予約しても何か月も先だったり病院の受診に否定的だったりする家庭もあります。

学校で全員が検査をするのであれば親の抵抗は少ないと思います。また、先生方も一人一人の検査結果を読み取り、どのように指導していけばよいのか参考になると思いました。この検査は、授業での学習能力が評価されるという点も特徴です。また、WISC との相関も高いこと（IQ が分かる）この検査を診察の補助資料として採用してくださる協力医として（黒川病院の岩城先生、佐藤病院の奈良隆寛先生）対応してくださるそうです。教師側からは、一人一人に合った指導をすることができ、学業不振で不登校傾向の児童生徒や発達障害の児童生徒への支援方法が具現化しやすくなるように思いました。

年間を通して1回の活動ではありますが、8名の会員の皆様に御参加いただき下記のとおり総会並びに研修会を開催することができました。

開催にあたり、事務局から事例の提供を参加者の皆様に依頼したところ、大崎市子育て支援課家庭児童相談員・母子父子自立支援員の鈴木宏子先生から貴重な事例の提供をいただきました。ご紹介いただいた三つの事例（詳細は割愛させていただきます）を通して、母子を取り巻く支援者やそれを支える施設、そして教員の持つ力について改めて知ることができました。参加者の皆様からも様々な意見や感想が寄せられ充実した会となりました。

○令和7年度支部総会・研修会

期 日：令和7年11月15日（土）13：30～16：30

会 場：トークネットホール仙台

内容等：（1）総会

- 報告 ・支部所属学校カウンセラー有資格者数
- ・活動内容、部会役員、事業報告他

- 協議 ・令和7年度事業計画、役員案等

（2）研修会

- ・事例検討（事例提供 鈴木宏子先生）

「寄稿」

「無理せず自分でいられる場所を」

宮城県支部副理事長 石川 健

「今、トラック野郎になって仕事で、全国を駆け巡っています」

「去年の4月から日本人学校の教師として頑張っています」

「昨年転職し、今は近くの農園で野菜作りにいそしんでいます」

これら3つの近況報告は、不登校を経験した若者たちからの年賀状等に添えられていた言葉です。

A君は普通高校1年の時に不登校に陥り、通信制高校に転校。大学に進学。

B君は、小学高学年から不登校。中学2年頃から別室登校が少しずつ可能になり、通信制高校、大学へと進学。

C君は、中学1年の夏休み後不登校。通信制校に進学してからは生徒会活動のリーダーを勤めた。

彼らが自立する上での心の栄養源やオアシスとなったところは「通信制高校」です。

1月23日付のNHKラジオ「不登校経験者 こうして大人になりました」という番組の中で、「無理せず自分でいられる場所を探すことの大事さ」を話していました。

まさに、3人とも「通信制高校」に進み、そこに自分なりに「無理せず自分でいられる場所」を見付け、「自分探し」をし、自分を語る「友達」と出会い、立ち上がっていったのではないかと思います。

私は、高校生段階の不登校経験者の受け皿として、「通信制高校」の存在はとて大きいと思います。

いつか、本学会でも「通信制高校」の先生、またはそこで学んで自立していった人たちを交えての「自分を語る」機会が持てればいいなあと思っています。

「あたたかい雰囲気にもまれて」 仙台市立吉成小学校 養護教諭 松宮 瑞枝

10年ぶりに再入会いたしました。

宮城県支部立ち上げと同時に入会した頃、私は、小規模の初任校から中規模の中学校に異動したばかりで、保健室来室者や保健室登校の生徒たちにどう向き合っていこうか、悩む日々を過ごしていました。赴任していた仙南地区では、充実した研修会が開催され、御教示いただくことができる先生方がたくさんいらっしゃり、本当に心強かったことが思い出されます。

その後家庭の事情で研修会に参加することが難しく、十数年経過してしまいました。地区が変わり、空白が空き、研修会参加のハードルが高く不安に感じていたところ、受付で「おかえりなさい」と言ってもらい、どんなに心強かったことかわかりません。あたたかい雰囲気にもまれ、一気に昔を思い出した瞬間でした。

私事ですが、ここ7年、不登校の息子から学ぶことがたくさんありました。いつまで待てばいいのだろうとため息をついた日も多々ありましたが、日々息子は成長し、今は次の進路へ向けて挑戦しようとしています。学会での学びが自分の根底にあったことに感謝し、また学び続けようとして今、思いを新たにしています。

「推薦図書紹介」

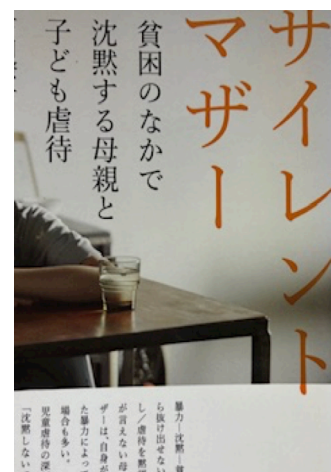
「サイレント マザー」 石川 瞭子 青弓社 大崎ブロック 鈴木 宏子

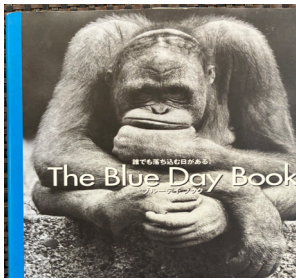
5年間相談員をする中で、夫のDVの下で身動きの取れないお母さんを保護した経験があります。「なぜ逃げなかったのか」「助けを求められなかったのか」疑問に思ってきました。この本はそんな疑問に答えを与えてくれました。

DVと虐待は表裏一体と言われます。DVの恐怖から動けなくなり、働けない、そして経済的に困窮する。その姿を子どもが見続ける。そしてその子どもも暴力から逃げられなくなる。まさに連鎖です。そのような事例がたくさん紹介されています。

「助けて！」が言えない母親＝『サイレント マザー』に「沈黙しないで！」と訴える。自分の関係者に支援を求めるように助言する。そのためには関係者である行政や機関がその母親の心理や状況を敏感に察知できることが大切になります。勇気を振り絞って支援を求めて来たときに的確に反応しなければ、その母親は深く深く沈黙してしまうからです。それは子どもたちにとって絶望に近い状態になります。

教育相談で保護者に接する機会の多いカウンセラーは、子どもを取り巻く環境の一つを知るためにもこの本を読むことをお勧めしたいと思い紹介させていただきました。





「誰でも落ち込む日がある The Blue Day Book」

Bradly Trevor Greive 著 竹書房

誰でも落ち込む日がある。どう生きれば思い悩むときがある。でもその先を曲がれば素敵な出会いがある。ひるまず思い切ってやってみよう。きっと元気になれる。・・・まえがきより
動物のしぐさや表情に癒される一冊です。英語の力もつくかもしれません。



「木陰の物語—家族の練習問題」 団 士郎 著 (株)シナノ

「月間学校教育相談」の連載でおなじみの団 士郎先生のほのぼののまんがです。団先生は長年児童相談所に勤務され、また立命館大学大学院の教授であり、漫画家でもあります。児童相談所で体験したことをもとに専門の家族療法をベースにした心温まる漫画は、「そんなに頑張らなくていいよ！」と寄り添う素敵な一冊です。

私は現職の時、保健便りの裏面に団先生も漫画を毎月掲載していました。保護者の方がとても心待ちにされていて、保健便りの発行が遅れると、催促に連絡が入ったほどでした。震災後には復興支援においていただいた先生です。

「本部の活動紹介」

「京都大会への参加—二つの自主シンポジウムでの発表の機会を経て—」

藤坂 雄一(石巻ブロック)

第37回日本学校教育相談学会(京都大会)は、「子どもの願いをつなぎ、分かち合う」というテーマのもと、全国から学校教育相談に携わる方々が参集され、龍谷大学附属平安高等学校・中学校を会場に8月に開催されました。震災以降、調査研究会に所属し10年に渡り自主シンポジウムで発表させていただく機会をいただいたことは、私にとって大きな学びとなっています。

本大会において、二つの自主シンポジウムで発表させていただきました。一つは調査研究委員会として「学校教育相談体制の充実をめざして②—教育相談コーディネーターの役割、教員に求められる教育相談のカー」というテーマで、もう一つは「生徒指導提要在改訂された今、学校現場にとって必要な学校教育相談とは③」というテーマです。それぞれ全国の実践家や研究者と共に積み重ねてきたことを発表しました。どちらの分科会も多く参加者を得て、熱量の高いシンポジウムとなり、テーマに対する関心の高さを実感しました。

教育相談コーディネーターを中心とした学校相談体制を構築することが重要であることが『生徒指導提要(改訂版)』において述べられているものの、その体制づくりが十分であるとは言いがたい状況が多いという実態があります。調査研究委員会では、①学校教育相談体制を機能させる学校風土づくり、②教育相談コーディネーターの役割に関する研究、そして③教員に求められる教育相談の力量形成に関する研究について、チームのパネリストの発表と共同研究者との対話を通してシンポジウムを進めました。

もう一つのシンポジウムにおいても、生徒指導と教育相談が一体となったチーム支援を進めるために

「教育相談コーディネーター」の存在が重要であると主張し、専門家の視点から、行政の立場から、現場の視点から取組を紹介しました。3年目となる今回は、それぞれの立場から積み重ねてきたことを整理して、「学校教育相談」が現場にどのような貢献すべきなのか、参加者と一緒に考え、確認する機会となりました私は、教職員集団をいかに「学び合い、支え合い、高め合う集団」へと導くかという組織論について発表しました。調査研究委員会でのデータを関連させ、教育相談における教員の資質・能力の可視化を試みました。従来「経験則」や「センス」に頼りがちだった教育相談の技術を、「アセスメント力」や「コーディネートと環境整備」などの六つのカテゴリーに整理し、質問紙に回答すると、自身の教育相談力がレーダーチャートとなって示される質問紙をチームで作成したことを発表しました。また、経験年数等と教育相談力との相関についても分析することで、研修によって得られる力と経験によって得られる力について考察しました。

京都大会の意義と重なるのは、教員が自身の専門性を自覚することが、結果として子どもへの多角的な支援につながるということです。職能成長を希求し、自身の力量をメタ認知することが力量形成につながっていくのだと感じています。

新規会員紹介

「K-12を意識した視点で子供達を見る」

宮城県一迫商業高等学校 教諭 阿部 秀也

K-12（ケー・トゥエルブ）という考え方があります。主に英語圏で使われる言葉で、幼稚園（Kindergarten）から高校卒業（12th grade）までの12年間の教育課程を指します。日本では「幼稚園・保育所年長」から「高校3年生」までのおよそ13年間に相当します。

私は高等学校に講師を含め13年間勤務してきました。現在は学年主任兼特支コーディネーターとして、多様な生徒の支援に携わっています。現任校含め赴任してきたいずれの学校もいわゆる「指導困難」な生徒が多く在籍する学校でした。その中で、子供の可能性の大きさを感じつつ、「伸びしろのある時期の関わりが人生を分ける」という現実を体感してきました。子供達をなんとかしたい一心で黒川病院の岩城先生のもとを訪ね、オンラインで約5年、毎月事例検討会を中心とした学習会を主催して学ばせていただく中で、中村恵子先生と出会い、お声掛けをいただき、この度入会させていただくこととなりました。

これまでの高校現場での経験だけでなく、**K-12**を意識した“すべての年齢の子どもを見通す視点”を意識して、皆さまと共に学びを深めていきたいと思っております。いささか未熟な点もあるかと思いますが、どうぞよろしく願いいたします。

「新会員となって」

川崎町立川崎中学校 養護教諭 安達 梨乃

今年度北海道の小学校から宮城県の中学校に勤務することとなり、地域における子どもの健康課題や発達段階、悩みの違いに戸惑う場面が多くありました。また、話を聞いてほしいと来室する生徒が多く、保健室での関わりのなかで生徒の思いや背景に触れる機会が多くありました。友人関係や家庭環境、将来への不安など、様々な思いを抱える生徒の気持ちを丁寧に受け止め、よりよい支援に繋げていくためにはカウンセリングについての理解を更に深める必要があると感じています。そんなとき、高橋豊校長先生や大学時代にお世話になった千葉久美子先生にお声掛けいただき、本学会に入会いたしました。学会での学びや先生方との交流を通して視野を広げ、日々の実践に生かしていきたいと思っております。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

宮城支部活動状況・事務局より



1 令和7年度の宮城県支部の活動報告

1 支部第23回総会

令和7年5月10日(土) 15:00～(会場:トークネットホール仙台 第2会議室) ※総会後懇親会開催

2 役員会(定例会)

○第1回理事会・会計監査

令和7年4月29日(火) 15:00～(会計監査14:00～)(会場:トークネットホール仙台 第2会議室)

○学校カウンセラー宮城県支部推薦委員会

令和7年11月15日(土) 10:00～(会場:トークネットホール仙台 第7会議室)

○第2回理事会

令和8年2月21日(土) 15:00～(会場:トークネットホール仙台 第6会議室)

3 事務局

○令和7年度会員名簿発行

4 各専門委員会

I 各専門委員会打合せ

令和7年5月10日(土) 総会終了後(会場:トークネットホール仙台 第2会議室)

II 各専門委員会活動

○研修委員会

①第54回研修会(令和7年8月23日(土) 13:30～(会場:名取市文化会館小ホール)

②第55回研修会(令和7年11月8日(土) 13:30～(会場:東北福祉大学仙台駅東口キャンパス)

③研究・事例発表会(令和7年11月8日(土) 9:50～(会場:東北福祉大学仙台駅東口キャンパス)

○広報委員会

・支部会報20号の発行(仙台ブロック)

・支部会報21号の発行準備(大河原ブロック)

○紀要作成委員会

・紀要第11号の発行準備

5 各ブロック(仙台ブロック)活動なし

(大崎ブロック) 役員会

令和7年4月18日(金)、12月25日(木)

ブロック研修会

令和7年7月12日(土)

ブロック顔合わせ会

令和8年3月

(大河原ブロック) ブロック研修会

令和7年11月29日(土)

(石巻ブロック) ブロック研修会

令和7年6月7日(土)

6 学校カウンセラー部会

○第9回総会・研修会の開催(令和7年11月15日(土) 13:30～(会場:トークネットホール仙台 第7会議室)

2 日本学校教育相談学会宮城県支部第54回・55回研修会

1 第54回研修会

○期 日 令和7年8月23日(土) 13:30～

○会 場 名取市文化会館小ホール

○内 容 「地域のつながりで支えるこころの健康」

○講 師 講師: 福地 成先生(東北医科薬科大学病院 精神科 病院准教授)

(公益社団法人宮城県精神保健福祉協会みやぎ心のケアセンター センター長)

2 第55回研修会

- 期 日 令和7年11月8日(土) 13:00～
- 会 場 東北福祉大学仙台駅東口キャンパス
- 内 容 「認知能力検査『NINO』を活用した児童生徒の理解と支援」
- 講 師 中村 恵子 先生(東北福祉大学 総合福祉学部福祉心理学科 教授)

3 日本学校教育相談学会宮城県支部令和7年度研究・事例発表会

- 期 日 令和7年11月8日(土) 9:50～
- 会 場 東北福祉大学仙台駅東口キャンパス
- ① 小山内 仙士先生(富谷市立日吉台中学校 教諭)
「会話から相談(対話)へ」
- ② 鈴木 直美先生(川崎町立富岡中学校 校長)
「子どもの姿を読み解く」



<編集後記>

記念すべき「きずな第20号」を発行できますことを大変嬉しく思います。巻頭言の渡辺美貴理事長の言葉にありましたように「きずな」の成人式を迎えられたこと、そして20号という長きにわたり編集できたことは会員の皆様の御尽力と「会報きずな」の持つ縁の賜物であると感じました。これからも末永く「きずな」の発行が続くとことを心からお祈りしております。

お忙しい中、原稿をお寄せいただきました皆様に心より御礼申し上げます。

仙台ブロック 高橋 晃子



「宮城県支部の理念・テーマ」